

Q-113

肺癌手術標本におけるLeu-7, Bombesin, NSE

大阪府立成人病センター内科、外科¹、病理²
中村慎一郎、佐久間貴彦、西尾浩、宝来威、
池上晴通、松田実、土井修¹、建石竜平²

肺癌手術標本102例(Sm 21, Ad 39, Sq 34, La 8)に
ついて、Leu-7, Bombesin, NSE, CGRP, Neurotensinの存
在を酵素抗体法により検索した。それぞれの陽性率
は以下のごとくであった。

Leu-7 : Sm 57%, Ad 44%, Sq 10%, La 38%.
Bombesin : Sm 57%, Ad 8%, Sq 0%, La 25%.
NSE : Sm 91%, Ad 62%, Sq 30%, La 88%.
CGRP : Sm 5%, Ad 18%, Sq 9%, La 14%.
Neurotensin 全例negative.

Bombesinは小細胞癌に高率に検出され、組織上
のマーカーとして期待が持たれる。また、Leu-7は扁
平上皮癌に出現率が低いということで、変則的なマ
ーカーとして利用できる可能性がある。一方、NSEに
関しては血清中での小細胞癌に対する特異性にも関
わらず、組織上では全組織型で高率に検出された。
一次抗体及び手技上の問題と思われるが、現時点で
はNSEを組織上のマーカーとして応用することは問題
がある。また、本来小細胞癌のマーカーとして報告
された Leu-7, Bombesinが腺癌および大細胞癌にも
存在することよりこれら非小細胞癌の一部にNeuroe
ndocrine featureを持つものが存在する可能性が示
唆される。

Q-115

癌性胸腹水中におけるシアル化Lewis^x、シ
アル化 Lewis^a (CA19-9)、CEA の比較検討

長崎大学医学部第二内科
○平谷一人、千住玲子、福島喜代康、朝長昭光、
広田正毅、斉藤 厚、原 耕平

目的：モノクローナル抗体(CSLEX1)を用い癌性胸腹水
中のシアル化 Lewis^x (以下S-Le^x)を測定し、同時に
測定した CA19-9、CEA と比較検討した。CSLEX1 が認
識する抗原 S-Le^x は CA19-9と isomerの関係にあり、
CA19-9が肺癌患者の血清中に高率に認められるのに対
し S-Le^xは肺癌、特に腺癌に高率である。今回は同様
の傾向が胸腹水においても認められるかどうかを検討
した。

方法：細胞診上 class V の患者の胸腹水の S-Le^x を
蛍光 EIA にて測定した。CA19-9、CEAは市販の RIA
kit を用いて測定した。対照として良性胸腹水を測定
した。

結果：S-Le^x の cut off point を mean+2SD、mean+
3SD で検討すると、肺腺癌ではそれぞれ 62.9、60.0%
の陽性率を示した。扁平上皮癌では陽性率は低く、小
細胞癌、大細胞癌は全て陰性であった。良性胸腹水は、
mean+3SDでは全て陰性であった。CEA は、感度は最も
良好であったが特異性はやや劣っていた。CA19-9は胸
水では陽性率は低かった。

Q-114

肺癌腫瘍マーカーの検討(第2報)一気管支鏡

下生検材料におけるレクチンを用いた検討の有用性

奈良医大第2内科¹、国立相模原病院²、
国立予研細胞免疫³

○米田尚弘¹、浜田薫¹、堅田均¹、江川信一¹、鴻池義純¹
成田巨啓¹、三上理一郎²、葛西正孝³

目的：我々は、第25回本学会総会においてα-D-
GalNAc特異的なDBA (Dolichos biflorus agglutinin)
レクチンを用いて培養腫瘍細胞、手術摘出腫瘍の表面マ
ーカーを検討し、肺癌などの腫瘍細胞に高率にDBAレ
セプターが存在する事を報告した。今回は、気管支鏡下
生検材料において検討し、同時に、CEA、Forssman 抗
原の分布と対比したので報告する。

対象および方法：気管支鏡下生検を施行した肺癌20例
を対象とした。方法は、凍結切片を作製し、FITC標識
DBA、抗CEA、抗Forssmanモノクローナル抗体との反
応性を蛍光抗体法で観察した。また同一切片について
TRITC標識DBAと上述の腫瘍マーカーの二重染色をお
こなった。

成績：①肺癌全例においてDBA陽性であった。
②CEA、Forssman 抗原はDBAとほぼ同様の反応性を示
した。③抗CEAとDBA、抗Forssman 抗原とDBA の二
重染色では、広範囲のオーバーラップを認めた。④健常
組織は陰性であった。考察・結語：DBAは、糖蛋白質
抗原CEAと糖脂質抗原Forssman 抗原の両者と類似した
分布を示した。細胞膜表面糖鎖の癌性変化を認識する
DBAによる気管支鏡下生検材料の免疫組織学的検討は、
肺癌腫瘍マーカーのスクリーニングに有用と考える。

Q-116

癌性胸膜炎症例における胸水中ポリアミン様物
質の検討

自治医科大学呼吸器内科：○斉藤達也、松岡緑郎、

倉富雄四郎、三重野龍彦、大野彰二、北村 諭

シオノギバイオメディカルラボラトリーズ：阿部健司

【目的】今回、ポリアミンの検討中これと性質の似た物
質(以下PALと仮称)を見出し、癌性胸膜炎における胸
水中PALの腫瘍マーカーとしての有用性を検討した。

【対象・方法】胸水貯留をきたした31例を対象とした。
癌性胸膜炎症例は、原発性肺癌14例、転移性肺癌6例の
20例である。胸水中のPALは、胸水を除蛋白後、高速液
体クロマトグラフィーにて溶離し、o-フタルアルデヒド
溶液によるポストカラム法で定量した。同時に胸水中の
CEAをZ-gel法で測定し比較検討した。

【結果】胸水中のPAL値は、癌性胸膜炎群では 2.09 ± 5.9
 $n \text{ mol/ml}$ (プトレッシン仮換算値)と対照群 1.09 ± 6.5
 $n \text{ mol/ml}$ に比して、有意に高値であった($P < 0.01$)。
PAL値のCut off値を $1.74 n \text{ mol/ml}$ (平均値 + S.D.)
以上と設定すると、癌性胸膜炎群では13例(65%)が高
値であった。CEAのCut off値を 5 ng/ml 以上とすると、
9例(45%)が高値であった。癌性胸膜炎群において、
PAL値の陽性率が高率であったが、有意差は認められな
かった。原発性肺癌症例では小細胞癌において、PAL値
が高値を示す傾向が認められた。

【結語】胸水中のPALは、CEAと共に有用な腫瘍マ
ーカーとなる可能性が示唆された。PALの構造を決定すると
共に、今後更に症例を重ね、胸水中PALの臨床的意義を
検討していく予定である。